

Title	合気道の源流をめぐる言説について
Author(s)	パイエ, 由美子
Citation	文化/批評. 2012, 4, p. 73-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75773
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

合気道の源流をめぐる言説について

パイエ由美子

はじめに——問題の所在

平和の武道として世界的に愛好者が多い合気道は、天才的と称される武道家である植芝盛平（以下、植芝と略す）が創始した武道である。合気道は植芝がさまざまな日本武術の研鑽を積み、その奥義を究め、さらに精神的研鑽を大本の出口王仁三郎のもとで積み、技法に独自の工夫と意味を加え、精神性を付加し現代武道¹⁾として確立した新しいタイプの武道である。第二次世界大戦終了の前後数年間は活動の停止を余儀なくされていたものの、昭和 23（1948）年には正式に財団法人合気会として発足、それ以来徐々に国内に拡がり始める。昭和 30（1955）年の各国大使を招いての公開演武大会開催後、世界的にも普及し始め、現在では世界 95 か国にまでその裾野が広がっている。

その主な技法の源流は、植芝の一時期の武術の師であった武田惣角（1859-1943、以下、惣角と略す）の大東流柔術であるとされている。この大東流柔術という名称については、惣角が大正 5（1916）年に「大東流柔術本部長」、大正 11（1922）年に「大東流合気柔術総務部長」という 2 種類の名称を用い植芝に許可を与えており、これについては合気道側と大東流側の言い分が食い違うところとなっている。（この点については第 3 章で論じる。）本稿では植芝が惣角より最初に受けた許可に使用されていた大東流柔術という名称を使用することとする。

惣角と大東流柔術はこれまでほとんど世間に知られることはなかったが、合気道が世界的に広まるにつれ、その源流として注目を浴びることになった。合気道の歴史について述べられるとき、必ず付随してその源流としての大東流柔術が参照されるからである。現在では、古武道を代表する流儀の一つとして武道愛好家に人気の高い流派となっている。

大東流柔術について語られるとき必ず述べられるのは、これまでまったく無名であったのは、それが「会津藩御留め技」であり一般には公開されていなかったからであり、しかし、その源流は清和源氏までさかのぼるということである。つまり、由緒正しい古武道という点である。

甲斐源氏武田家の秘術であった大東流が会津に下った武田国継²⁾によって会津藩に伝承され、「御式内」という上級武士にのみ許される秘伝として藩内に伝わった。それを惣

角が旧会津藩家老西郷頼母（1830-1903）（後に改め保科近恵となるが、本稿では西郷頼母とする）から免許皆伝を受け、その会津藩の秘術「御式内」を全国に広めることを許されたということになっている。

この伝承は主に合気道側がその技法の源流を語るとき述べていたものであり、植芝が惣角から伝えられていた内容を述べていたものと考えられる。これを語ることによって合気道側も、その「由緒正しさ」の恩恵を受けていたはずである。

しかし、大東流柔術が徐々に注目され、武道雑誌等に掲載されるに従い、この大東流柔術の由緒正しさに、武道研究者や武道愛好家の間で疑問が持たれ始めていった。

例えば、大東流柔術について『秘伝日本柔術』³⁾では、「会津藩に秘密武術として伝えられたという説には、疑問を持っている人も少なくなく」⁴⁾その理由として、武田惣角以前の伝承については、西郷頼母の下で学んだことが明らかなこと以外は、すべて惣角以後の口伝であり、それを事実として証明するのが困難であることや、古武術では技法の名称は、その特徴、目的などから付けられるが、大東流柔術は惣角時代には名称がなかったこと等が挙げられている。

さらに、古流柔術研究家の平上信行は『秘伝古流柔術技法』⁵⁾において、大東流に関して「本質的に古典と工夫伝、付加技法が混在しているのが現在の大東流の実体であり古流としての面目を保つ部分は極めて僅少であると指摘する外ないのである。」⁶⁾と述べている。

このような指摘を受けた大東流柔術宗家は、これまで通説となっていた「武田家秘術」がそのまま会津藩の御留め技である「御式内」という武芸となったというのではなく、西郷頼母からの継承を中心に、アレンジを加えた説を語り始めた。

確かに、惣角は会津藩出身の人物であり、西郷頼母との接点は認められる。しかし、惣角が元家老の西郷頼母から武芸の免許皆伝を受けたという点は、あまりにも飛躍的に発展した合気道の源流として、急速に注目を浴びることになった大東流柔術の権威づけのために新たに強調されたことではなかろうか。疑問視された惣角以前の伝承ではなく、『英名録』⁷⁾に署名が残されている西郷頼母からの系譜をより前面に打ち出したと考えられる。

大東流柔術前宗家、武田時宗が武道家として専門的に活動し始める以前に、合気道側からの一方的な言説によって大東流柔術と武田惣角のイメージは形成されてしまった。さらに、注目度が高まるにつれその伝承について取り沙汰されることが増えた。ゆえに、その伝承についての疑問や惣角についての好ましくないイメージを払拭し、より威厳あるイメージを持つ流派への刷新のための策を施したと考えられないだろうか。

また、現代武道におされ、「真にマイナーな存在であり、古伝を伝える人は本当にいな

いようになってしまった」⁸⁾ 古武道界で、合気道の源流として世間の注目を集めた大東流柔術は、古武道の代表のような存在となってしまった。それゆえに、大東流柔術宗家はその注目に値するような確実な流派史が必要となったのではないだろうか。

さらに、次々と情報を発信し続け、大東流柔術が合気道技法の源流であることは認めながらも植芝と惣角の関係性の薄さを強調した合気道側は何を意図していたのであろうか。以上について、合気道側と大東流柔術側の資料・文献を用いて問題点を明らかにする。

まず合気道の源流と言われる大東流柔術が現在までのように語られてきたかを示し、それによってどのようなイメージが確立したのかを検討する。次に、この確立してしまったイメージを大東流柔術側ではどのように変えようとしているかを考察する。さらに、植芝はこの大東流柔術からどのような点を排除し合気道の技法を確立したのかを検証する。

1. 合気道の源流——武田惣角

合気道の源流とされる大東流柔術の成立がどのように語られているかを検証する前に、まず、大東流柔術の「中興の祖」と呼ばれる惣角について簡単に記しておきたい。

惣角については、合気道研究の第一人者と言われる『合気ニュース』⁹⁾の創始者スタンレー・プラニン¹⁰⁾による『武田惣角と大東流合気柔術』¹¹⁾が最も代表的なものと言える。次に、中国武術研究家で真言密教僧侶でもある松田隆智による前述の『秘伝日本柔術（復刻版）』の「大東流篇」¹²⁾であろう。もちろん、これら以外にもさまざまな武道家の言説や武道誌の特集記事によっても紹介されている。（たとえば惣角の弟子たちの言説、『月刊秘伝』など。）また、それらを下敷きにして執筆されたと思われる小説『鬼の冠 武田惣角伝』¹³⁾も出版されている。

プラニン及び松田によると、惣角は会津（福島県）御池田に武田惣吉と、有力な藩士で槍術、剣術、薙刀術、針吹術の名手であり、藩の居合術の指南役でもあった黒河内伝五郎（1803-1868）の娘、富の次男として生まれた。武田家は代々神職であり、長男の惣勝が後を継ぐことになっていた¹⁴⁾。

父、惣吉は相撲に強く会津藩の大関力士でもあった。古来より相撲と神社神事は深い関係があると言われていたので、惣吉が神職にあったとともに力士でもあったのは不思議なことではない。惣吉は選抜された力士で組織された「力士組」の隊長として、蛤御門の戦、鳥羽伏見、白河口の戦などに参戦し、戦後は武田国継開基と言われる西光寺に寺子屋を開いたり、自邸で相撲を指導したりしたという¹⁵⁾。

この惣吉に関してはこの惣吉に関しては人気武道雑誌の特別編として出版された『大東流合気柔術総覧』では、相撲が得意で会津角力界の大関であったことは記されているが、

惣吉が大東流柔術、その他の武術を修めていたかどうかは資料不足で不明¹⁶⁾、としている。しかし、昭和5年8月17日付の東京朝日新聞に「世を避けた今ト傳」と題された記事に惣角のインタビュー記事があり、10手ほどの技法を記者に示した後、大東流合気術（新聞ではこの名称が使われている）について以下のように記者に語っている。

自分が父から受け継ぐ時は覚えが弱いからといつて両手の爪の上にお灸を毎日すえられたといつて、数十年後の今日までまざまざと残されたその跡を見せてくれるなど午前2時になつても話はつきない。

この記事からすると、やはり惣角は父の惣吉から相撲以外の武術も伝授を受けていたと考えられる。惣角は150センチメートルに満たない小柄な体（「5尺に満たない」と説明されている）であったが、非常に敏捷で相撲に強かったという逸話が残されており、したがって、父の惣吉から相撲や柔術の技法を学んだこと、さらに、一時母方の祖父、黒河内伝五郎の養子にもなっていたことから、この祖父からさまざまな武術の手ほどきを受け、影響を受けていたことも確かであろう。

『秘伝日本柔術』¹⁷⁾によれば、惣角は明治3（1870）年に小野派一刀流剣術に入門し、明治9（1876）年に免許皆伝を受けている。

惣角はこのような武術環境の中で育ち、幼いころから、相撲をはじめ様々な武術においてその素質を発揮していたと思われる。しかし、学問には興味を抱かず、父の寺子屋塾をたびたび逃げ出したため破門されたという逸話¹⁸⁾も残っており、生涯読み書きがあまり得意ではなかった。そのため、惣角自身による大東流柔術の歴史に関する記述がなく、そのことが一層この流派の歴史を不明なものにしていると言える。

惣角は13歳のときに東京の著名な直心影流剣術家・榊原鍵吉（1830-1894）の内弟子となり、そこで武道いわゆる武芸十八般を学んだとされている¹⁹⁾。

植芝に関しては後継者である植芝吉祥丸や弟子の砂泊兼基が伝記²⁰⁾を執筆しているが、惣角については、後継者である武田時宗前宗家も、また、他の高弟たちも伝記を著してはならず、不明な点が多い。しかし、このミステリアスな部分が古武術愛好家の好奇心を一層惹きつけることになっていると考えられる。

惣角は『英名録』と『謝礼録』と題された記録帳に自らが伝授した門人、または、戦って打ち破り門人とした者に詳細に氏名、教授内容、謝礼等を記録させていた。その『英名録』は宗家により保存されている。それらは一般には公開されていないが、武道関係の書物や雑誌には写真が掲載されている。実際にその記録帳を検証したプラニンによると、こ

の存在によって明治20(1887)年以降、昭和18(1943)年に青森にて帰らぬ人となるまでの惣角の足跡は確実に知ることができるとしている。

惣角と植芝の接点は、惣角が北海道に滞在していた時の植芝との出会いにあり、植芝が惣角の技に感銘を受け大正4(1915)年に即入門、その後植芝が開拓していた白滝村に家を持つようになり教授を続ける。その後、植芝が和歌山へ帰郷の際、白滝の自宅を譲り受ける。植芝の綾部移住後も綾部を訪れ、二人の子弟として関係は昭和11(1936)年頃まで続いている。

2. 大東流柔術をめぐる言説

1) 合気道側による言説

合気道側ではその技法の源流についてどのように語ってきたのであろうか。

植芝の2代目後継者であった植芝吉祥丸(以下、吉祥丸と略す)は、大東流柔術について『合気道開祖植芝盛平伝(改訂版)』²¹⁾において「清和(天皇)源氏の流れをくむ新羅三郎義光を始祖とする武田一族の武技であると伝えられる。滋賀の大東の館で修練されたのが名称の起こりとされており(異説もある)、代々甲斐武田家によって継承されてきたという。その後、甲斐武田家の名将・武田信玄の血を引く一族で、会津(福島県)の地頭職に就任した武田土佐国次によって会津藩にも伝承され、同藩のいわゆる「御留め技(藩外不出の秘伝)」として幕末まで伝えられた。植芝の師である惣角はその武田土佐国次の末孫である。」²²⁾と述べられている。

また、昭和32年に植芝監修、吉祥丸によって執筆された『合気道』²³⁾には、その北海道時代の章に「大東流柔術が、会津藩の御留め技として、誠に得難い武道であることを知った青年植芝は武田惣角氏を招聘し、選抜した配下の人20名と共に猛烈な修業を始めた」²⁴⁾という記述がある。

その後同じく植芝監修、吉祥丸の昭和37年に出版された『合気道技法』²⁵⁾に大東流柔術は「その伝書によれば抜数二千六百六十四手とあり、武家時代の立居振舞を基準として当時考え得るあらゆる攻防の秘術を含めて出来上がっている。」²⁶⁾と述べられている。

植芝の伝記本である『真の武人』²⁷⁾によれば、大東流柔術は「明治になるまでは、あまり聞いたことのない流名であった。この流儀は、古く新羅三郎義光を遠祖とするといわれ、一子相伝の武術として古来、会津に伝わり、明治以後は他の地方にも流布されたもので、惣角はその正流の流れをくむ者であった。」²⁸⁾という説明がなされている。

また、植芝の合気道創成時代の高弟の一人で、後に独立した塩田剛三の創設した「合

「気道養神会」の技法書にも、合気道の歴史について上記に述べてきたものと同様の説明がなされている²⁹⁾。

以上のように合気道側では、惣角の語りをそのまま踏襲していることが見てとれる。惣角が植芝に伝え、それを植芝は吉祥丸や弟子に伝えたのであろう。

2) 合気道側以外の言説

次に、合気道側以外ではどのように説明されているのか見ておこう。

惣角本人は何も記録してはいないが、以下の『東京朝日新聞』、昭和5年8月17日付の惣角へのインタビュー記事におそらく惣角自身が説明したであろう大東流柔術の歴史について述べられている。

その昔會津藩の秘流武術としてひろめられていた大東流合気武術は明治になつてから、同流の正統武田惣角翁によつて幾百年のなぞが世間に出た。この武術こそは在来の剣道や柔道等の到底及ばぬ、しかも護身術としてもつとも優れたものだといはれている。

また、同新聞の昭和11年4月30日付の記事には以下のように記されている。

大東流の開祖新羅三郎の正統をくみ、大東流が會津藩の秘流武術として幾百年の門外不出だったのが明治卅年から翁が全国に行脚するに及んで漸く世に紹介されはじめたものである。その昔新羅三郎が死刑に處せられた罪人の死骸を解剖し（中略）、四股の逆手を考え出したのがそもそもの大東流の起源で藩主は他藩に洩れるのを恐れ六百石以上の家臣が近侍の者以外は一切傳授しないこととし傳授されたものも他言を許されなかったものである。

これらの内容は合気道側が発信してきたものと同様であると考えられ、やはり會津藩伝来の秘術であるということが語られ、その名称は大東流合気武術となっている。

次に、少々異なる解説がされているのは、昭和31（1956）年に出版された『合気之術』³⁰⁾である。武田家に伝えられていた武田流武術は、武田家滅亡の折、高弟の一人大東久之助が會津に逃れ、大東流柔術を名乗り、この技法を教えたとされている。武田家に伝わった「相気之術」を合気と名乗ったのは昭和の初年である、と述べられている。さらに、惣角は父から合気之術を習っていたが、會津藩主・松平容保から免許皆伝を得て³¹⁾その正統な後継者となったと記されている。しかし、ここでは大東流柔術、相気之術、合気之

術という異なる3つの名称が使われており、これらの関係性が明確ではなく、また、惣角が許可を受けたのも西郷頼母ではなく、松平容保となっている。

また、昭和53(1978)年の『武道流派大事典』³²⁾によると、大東流とは「旧幕時代において会津日新館の教科武芸であって、そのもとは太子流兵法・溝口派一刀流・柔術等の藩内武術の極意を、藩政にもとづいて総合化したもので、藩士五百石以上の上士のみには指導したもの」³³⁾とされている。さらに、これは旧会津藩家老西郷頼母近恵の指示によって武田惣角が世間に広めることを許されたことになっている³⁴⁾。

ここでは、大東流柔術側の主張する武田家伝来の秘術、さらに、惣角が西郷頼母より許可を受けた点については述べられていない。

以上が大東流柔術側が積極的に情報を発信する以前に、大東流柔術の歴史として語られていたことである。

3) 大東流柔術側による言説

合気道が徐々に広まるにつれ、その技法の源流とされる大東流柔術そのもの、さらにその「武田家伝来の由緒正しい秘術が会津藩に伝わったものであり、それが御式内という御留め技となり藩内で守り継がれ、明治期に惣角によって初めて世間に伝えられることとなった」という説も武道関係の書籍において紹介されることになり、有名なものとなった。

皮肉なことに、合気道が取り上げられる度に、その源流としてこの説が取り沙汰されることになり、それに疑問を持つ者が出始めた訳である。昭和53(1978)年の、『武道流派大事典』や『秘伝日本柔術』の相次ぐ出版により、これまでの説とは異なる点が指摘されたのである。その指摘された疑問点としては、はじめに述べた点以外に、他の御留め技とされていた將軍家の柳生新陰流、島津藩の示現流、南部藩の諸賞流など是有名であり、藩外の人間が学ぶことは不可能でも広くその存在は知られていた。ゆえに、大東流柔術のように長期間世に出ていないのは不可能であること。また、甲斐武田家から会津武田家に至る頃までの武術で重要なのは「甲冑組討ち」の技法であるが、大東流の武術は「素肌武術」の傾向が強いこと³⁵⁾、等の点である。

確かに、『日本古武道総覧』³⁶⁾では「古武道の年代別分類」がされており、徳川期以前、徳川期に成立したもの、講武所及び幕末に盛況をきわめたもの、さらに各藩御留め流が掲載されているが、大東流柔術はそのいずれにもふくまれておらずその由緒正しい御留め流であったということは証明されていない³⁷⁾。

そこで、大東流柔術では自ら発信できる場を与えられた昭和56(1981)年以降の武田時宗前宗家による公開演武以降、投げかけられた疑問を払拭するべく伝承にアレンジを加

え語り始めたのではないだろうか。

まず、大東流柔術前宗家、武田時宗（惣角の次男）は、昭和60 - 61（1985 - 1986）年にかけての『合気ニュース』のインタビューで流儀の成立について以下のように答えている。

清和天皇の末孫新羅三郎義光という人が奥州に行った時、人を解剖して研究したのが大東流の起こりです。彼が大東という所にいて、大東の三郎と称していた。それから由来しているのです。武田家も清和天皇の血統ですから、ずっと武田家に伝わったのです。³⁸⁾

武田家由来の武道という点については同様であるが、もう一つの疑問とされていた会津藩御留め技としての御式内については、以下のように述べている。

殿中でいろいろ研究されてできたのが「御式内」と言います。御殿術であり、江戸城の大判部屋（格式のある人用の部屋）を通過する時は刀は全部取り上げられた。（中略）大東流はその時に使われた技であり、将軍家の前では膝行だけであったので、大東流では膝行を盛んにやり、大東流特有のもの。³⁹⁾

武田家由来の大東流柔術が殿中で研究され御式内となり、御殿術となったという改訂が見られ、疑問点として挙げられていた「古い成立の武術のわりには素肌武術の傾向が強い」という指摘に対応しているとも考えられる。また、大東流柔術特有の膝行による技法を挙げることにより、御殿術であったという御式内の存在を強調していると考えられる。

一方、大東流柔術前宗家亡き後、中心となってこの流儀を教授している近藤勝之（現宗家）は前宗家の説をさらに発展させ、もともと大東流柔術には武田家伝承武術と会津藩御留め技という二つの武術が存在し、その二つを合体させて現在の大東流柔術を作り上げたのが惣角である、とした。

武田家伝承の大東流が保科正之に継承され、それが殿中護身武芸、御式内に改訂され、歴代会津藩主に継承された、という点は前宗家と同様である。前宗家によれば、それがそのまま西郷頼母により惣角に伝わったことになっている。しかし、近藤現宗家は、武田家伝来の武術である大東流柔術も綿々と武田家内で継承され、惣角は父惣吉からそれを伝授されたとしている。つまり、惣角は「武田家伝来の大東流柔術と会津藩の御式内の両方を学び、この二つを集大成し」、大東流柔術を作り上げたとしている。

前宗家による説をさらに詳細にしたこの近藤現宗家の語る大東流柔術の歴史は、武田家伝承の系譜がやはり明瞭ではないが、御式内という武芸の存在と家老であった西郷頼母のつながりが以前よりは自然となった。

合気道側から発信された情報によって形成された大東流柔術の粗野なイメージを新たにするために、「殿中護身用武芸」と言った語彙を用い、大東流柔術側は殿中で身分の高い武士の間だけに許されていた格式高い古武道である、という点を強調した。単に会津藩に受け継がれた御留め技ではなく、保科正之が殿中で用いられるよう護身用武芸に改訂したもの、という点が補われたのである。

前宗家による活動が活発になる前に流派史において強調されてきたポイントは、武田家の秘術であったものが、会津藩に伝わり会津藩御留めの「門外不出」の秘伝武芸になったことであった。この点を強調していくためには、武田家の惣角に至るまでの伝書が必要であった。しかし、『英名録』の西郷頼母による署名しか明らかにできないため、西郷頼母が秘伝武芸の継承者としてふさわしい武道家として認識されなければならなかった。しかし、西郷頼母を会津藩秘伝の大東流柔術を修めた武道家とする根拠は、小柄であったこと（細かく複雑な技法の多い柔術を修めるには小柄が有利とされており、西郷頼母は「三尺達磨」と称されるほど小柄であった。⁴⁰⁾、頼母が長男吉十郎有鄰を病で失ったため、講道館柔道で有名であった志田四郎（後に西郷四郎）を養子にしたことぐらいであった⁴¹⁾。（養子にした理由を大東流柔術の継承のためとすることが可能であるから。）そこで、流派宗家は、武田家伝来の武術を保科正之が改訂、殿中において活用できるようにし、それを家老であった西郷頼母に継承させたという新たな系譜を創作したと考えられる。殿中で用いるための護身用武芸であれば、家老であった西郷頼母がそれを修めていても自然ではないし、大東流柔術には殿中の立ち振る舞いで必要とされる半身半立ち（膝で立つ）の技法と膝行（座った状態、膝をついて動く）が多いことで説明がつくと考えたのではなかろうか。

惣角と西郷頼母との接点については、代々神職であった惣角の家を長男の惣勝が継ぐはずであったが、病により早世した。そのため、後を継ぐことになった惣角は故郷に呼び戻され、西郷頼母が官司として務めていた都々古別神社（福島県東白川郡）に神職見習いに行ったとされている⁴²⁾。

西郷頼母研究会による『西郷頼母近恵の生涯』⁴³⁾には『英名録』に含まれている西郷頼母による伝書 — 惣角の捺印とともに「旧会津藩士保科近恵門人 福島県河沼郡広瀬村大字御池田六十三番地 大東流柔術本部長武田惣角」と記されたもの、さらに、「明治三十一年五月十二日 靈山神社官司保科近恵」の署名・捺印とともに「しるや人川の流れ

を打てばとて水にあとある物ならなくに」という歌 — これらが写真で紹介されている⁴⁴⁾。

また、この歌に関して「別記には、この歌は、その日より同年六月二十六日まで、近衛が武田惣角に大東流合気柔術の奥義を伝授し、惣角を免許皆伝とする際に記した歌であることが記録されている。」⁴⁵⁾と説明されている。

確かに西郷頼母は、明治22年から明治32年まで霊山神社の宮司を務めており、惣角と接点があったことは確実であろう。

大東流柔術は北海道網走の地において継承されてきていたが、合気道の世界的展開に伴い、国内外で知名度が上がり、注目を浴びることとなった。そこで合気道側の情報により既に確立していた大東流柔術に対する粗野で血なまぐさいイメージを、将軍家との関わりや殿中護身用という言葉で洗練されたものに変えようとしたと考えられる。

さらには、現代武道－合気道を産み出した「親」とも呼べる古武道・古武術として開祖伝説のストーリーだけでなく、史実に基づいた流派史と「筋目正しい流儀の道統に属するものであるかどうか」⁴⁶⁾の証明が必要となり、西郷頼母からの継承という系統が積極的に述べられることになったと考えられる。

『秘伝日本柔術』では、大東流柔術の伝承に関する疑問が述べられてはいるものの、古武道界においても老舗であり、徳川期以前に成立したと証明されている竹内流・諸覚流、さらには、徳川期に成立した柳生流と同格に紹介され、演武写真も初めて公開された。また、古武道に関する書物の刊行も増加し⁴⁷⁾、大東流柔術の人気をきっかけに、それまで静かであった古武術・古武道界が活気を取り戻すことになった⁴⁸⁾。古武道振興会と日本古武道協会からも表彰され、表舞台に立った大東流柔術は、一気に古武術、古武道界の期待を背負うこととなり、対外的にも「立派な」古武道としての「体裁＝歴史」を整える必要があったのではないだろうか。

大東流柔術には「信頼できる最古の柔術流派」⁴⁹⁾と言われる竹内流のように書き記された伝書がなく、古武術としての歴史は、惣角が息子や弟子に語った口述によって残されているものであった。それゆえに、その歴史に疑問が持たれ、また、古武術としての存在そのものにも疑問が持たれ始めた訳である。惣角以前の伝承を証明できる唯一の証は、『英名録』に残された西郷頼母の署名のみであり、史実として考えられるのは会津藩以降の展開である御留め技、もしくは御殿術であったこと、そしてそれが西郷頼母により許可をうけたことである。したがって、この関係を補足し強調するために新たな説が必要であったのではないだろうか。

武道界において、現代武道としての位置を揺るぎなきものとして確立し、合気道の影のような存在から脱却した大東流柔術が、さらに、古武道界においての地位を確かなものと

したいという切実な願いから発したことであろうと考えられる。

3. イメージ再構築の必要性

1) マイナスイメージの確立

合気道は「平和の武道」として認識され、世界的に発展し、精神性の高い現代武道としてその地位を不動のものとした。技術面は大東流柔術から影響を受け、植芝が改良を加え、さらに技法に意味づけをし、「武道の根源は愛である」という精神性を加え創成されたものである。

つまり、合気道が「平和の武道」として世間に知られていくにしたがって、大東流柔術の知名度も上昇するが、それと同時にこの柔術流派は「植芝によって切り捨てられた戦闘的、野蛮性」を持つ洗練されていない武道というイメージも確立する。大東流柔術だけではなく一般に古武道と呼ばれる流派の持つイメージは「現代武道でありえない実戦武術としての非常に優れた技術であると同時に大変に危険極まる部分も含んだもの」⁵⁰⁾である。

特に惣角の武道の達人であるが、非常に気性の激しい人であり、読み書きが不得意であったこと、また、謝礼録を残しすべての金銭のやり取りについて書き記していたことから、「非常に金銭にこだわり、1つの技をいくらで教授した、というように技を売っていた」かのようなマイナスのイメージが出来上がった。

では、いかにこのようなイメージが出来上がってしまったのであろうか。それは、合気道側からの一方的な発信により出来上がったと考えられる。

惣角はその晩年のほとんどを北海道に戻り過ごしたものの、昭和18(1943)年に青森で死去するまで大東流柔術の教授を続けていた。しかし、植芝のように定まった道場と組織を生涯持つことなく、明治・大正・昭和と日本全国を巡り大東流柔術を教授していた。

惣角の亡き後宗家となった武田時宗前宗家は、警察官を経て一般企業を退職するまでは専門の武道家として活動していたわけではなかった。前宗家が武道家として専門に活動し始めるのは、退職した昭和51(1976)年以降であり、特に昭和54(1979)年、網走市に大東館道場設立以降のことであると考えられる。さらに、古武道界にその存在を公にし、一般に大東流柔術の技を公開したのが昭和56(1981)年、日本武道館で行われた日本古武道大会での演武であり、これがテレビで全国放映された⁵¹⁾。これにより、大東流柔術は合気道の源流としてのみ注目される流派ではなく、それ自身の存在によって注目されることになった。ここまではいわば合気道の影の存在であり、したがって、この時期に至るまでの大東流柔術、あるいは惣角について一般に発せられる情報はすべて合気道側からの情

報であった。

合気道は終戦前後の一時期のみ活動の停止を余儀なくされていたが、勝つことを目的としない、心身鍛錬、人間形成を目的にした武道として戦後の比較的早い時期に文部省の認可を受け活動を再開し、順調に発展した。

嘉納治五郎(1860-1938)は柔道の普及のためその技を理論化し、「言葉によって合理的に説明」し、さらに、技のみならず「柔道の原理、目的、意義、修行方法など」をわかりやすく解説する活動に熱心であり、それが成功したとされている⁵²⁾。合気道の母体となった財団法人合気会もこれに倣って同様に、昭和28(1953)年から会誌等を発行し積極的に「言説活動」⁵³⁾を始めている。この合気道側からの一方的な情報発信によって、惣角と大東流柔術のその後のイメージが確立したと言える。

1957(昭和32)年に合気道創設後初の単行本『合気道』⁵⁴⁾が刊行されるが、ここにおいて合気道と大東流柔術の関係が語られ、一般に大東流柔術の名称が知られることとなったと考えられる。この『合気道』の刊行以降、以下に記すように合気道に関する出版、または演武会が活発に行われている。

昭和32年(1957年)『合気道』出版

昭和34年(1959年)『合気道新聞』第1号発刊⁵⁵⁾(現在も続いている)

小説『王者の庭—合気道植芝盛平伝』⁵⁶⁾出版

昭和35年(1960年)財団法人合気会主催第1回演武大会開催(これより毎年開催)

昭和37年(1962年)『合気道技法』⁵⁷⁾出版

昭和44年(1969年)『合気道開祖植芝盛平』⁵⁸⁾出版

昭和45年(1970年)『合気道教範』⁵⁹⁾出版

昭和48年(1973年)『絵説合気道独習教本』⁶⁰⁾出版

昭和49年(1974年)『合気ニュース』⁶¹⁾発刊

昭和53年(1978年)『合気道開祖植芝盛平伝』⁶²⁾出版

昭和56年(1981年)『合気道のこころ』⁶³⁾出版

これだけの情報が武田時宗前宗家が日本古武道大会にて演武し、注目される昭和56年までの期間に合気道側から発信され、その都度大東流柔術と惣角について何らかのことが語られているのである。

では、この中で合気道の側はどのように大東流柔術を語っていたのであろうか。

その歴史については前述しているので、惣角と植芝の関係、そして武道観について、い

かに述べられているかを最近相次いで復刻版が出版された3冊『合気道』、『合気道技法』、そして『合気道のこころ』を中心に検討する。合気道が組織的に拡大していくにともない、その源流に対する言説も微妙に変化していくのが見てとれる。

『合気道』では、惣角と植芝の出会いについて2代目吉祥丸は以下のように述べている。

惣角師範は非常に小柄であったが、実に達人であったので、道主（植芝）は深く傾倒し（中略）、なお、大東流における道主の修業は、明治44年に始まり、大正5年に允可を受けたのであるが、実際には武田氏の側近で指導を受けたは百日足らずの短期間で、その他は主として自身の工夫練磨によるものであった⁶⁴。

ここでは、植芝が惣角から実際指導を受けたのは百日足らずと強調されており、合気道の技法はあまり大東流柔術の影響を受けてはいないということを言外に述べている。

同じく『合気道』巻末に掲載された座談会の抜粋⁶⁵では、植芝は以下のように述べている。

武田惣角先生に会い、30日ほどでしたが、教えを受けているとき、なんだかよくからないんですが、ある靈感のようなものを感じたのです。

また、大東流の稽古中に合気道を悟ったのかという質問に対し、植芝は「いえ、武田先生には武道の目を開いていただいた、といった方がいいでしょう。」と答えている。さらに、惣角と植芝の子弟関係については以下のような記述が見られる。

- ・ 食事の調理から風呂の世話まで、何事によらず一切自分の手で行い、ついには家まで 新築してさし上げた。
- ・ 一技参百円（明治時代末期）を師匠に修めた上、（中略）薪水の労を続けてからでなければ、なかなか許されなかったものである。この武道修業によって道主は、親から受け継いだ財産を殆ど蕩尽したのである⁶⁶。

ここでは、植芝が惣角により教授を受けた期間は決して長いものではなく、合気道は大東流柔術から悟ったものではないこと、さらに、植芝の師にたいする献身ぶりが強調されている。また、「一技参百円」と惣角の教授料が当時としては法外に高額であったことが述べられている。これ以降、これらの大東流柔術と惣角についての情報は、さまざまな合

気道関連の出版物やメディアで再生され、ひとつのイメージとなって確立していく。

『合気道技法』では、植芝の師について以下のように記されている。

- ・翁（植芝）が情熱をふるって師事したのは、起倒流の戸沢徳三郎氏であり、（中略）中井正勝氏の柳生流もその技術の点では現在の合気道の技術面に数多い影響を与えている。合気道の誕生について戸沢、中井両氏は忘れることのできない方々である⁶⁷⁾。
- ・武田惣角氏に師事した翁は、この大東流によって技術の「広さ」を体験した。しかしながら、その「深み」に至っては、未だ飽き足らぬものがあったように思われる。その動きは、強さこそ出ているものの、強さを包む柔軟さに欠けていたようである。
- ・（植芝は）「強くあれかし」とのみ希い、相手により以上の打撃を与えることのみ的心境が、やがては自分の前に立ちはだかる壁となり、山となって、その行手を塞ぐことに気付いた⁶⁸⁾。

ここでは、植芝が熱心に修行した流派は大東流だけではなく、柳生流や起倒流も含まれることを述べ、さらに興味深いことに、これらの流派に関しては教授料については一切記されていない。また、柳生流の師、中井正勝については「立派な武士道気質の人」であったと述べられており、「激しい気性、峻厳そのもの」と称された惣角とは対照的である。

また、大東流柔術は技法としては多くのものが存在するが、そこには「深み」、「柔軟性」がなく、さらには「相手を痛めつけること」のみに主眼が置かれた流派であるかのような説明がなされている。明らかに合気道の方をより高潔で洗練された武道と捉えていることが理解できる。

補足として、砂泊兼基の『合気道開祖植芝盛平伝』には出口王仁三郎の惣角観が紹介されているので以下に記しておく。

- ・観相に長じた出口王仁三郎師は、いちおう一道に達した人物とは見ながらも、「数奇な運命の持ち主」ではあるまいかと開祖にいい、なにやら「血の匂いがする」とて、人間的にはあまり好まれなかったと聞いている。

日頃から出口王仁三郎を尊敬していた植芝は、この惣角観に多大なる影響を受けたと考えられる。

『合気道のこころ』には、植芝の二代目である吉祥丸の武道観が述べられているが、大東流柔術という名指しではなく、合気道と古武術・古武道との違いとして書かれている。

- ・「サムライの規範」としてほぼ完成の域に達した古武術や古武道は、武士社会が残した貴重な遺産として歴史的には高く評価されるべきだが、旧来のままのかたちではやはり明治維新以降の世にふさわしいものとはいえないこと。
- ・心情においては古武術・古武道への捨てがたい愛着をいだきつつ、理知判断において時代錯誤を避けたこと⁶⁹⁾。

ここでは、大東流柔術とは限定していないが、古武術・古武道は新時代にふさわしい武道ではなく、植芝は力を競い合う既存の武道に満足できなかったこと、自らの理想とする真の武道を創成したという点が示されている。

以上示したように、大東流柔術と惣角に対するイメージは合気道側の発した言説によって、昭和56年の古武道大会で大東流柔術が一般に認知されるまでに出来上がっていたと言える。このように確立してしまったイメージを刷新すべく、さらに、疑問視されている点を払拭すべく大東流柔術側では古武道にふさわしい流派史を対外的に発信していく必要があったのである。

2) 大東流柔術側によるイメージ再構築

皮肉なことに、合気道側の言説によりその戦闘的、実践的な技術と、惣角の武道家としての特異な人格に生き方に興味を持たれた。さらに、一般企業を昭和51年に退職した武田時宗の大東流柔術宗家としての活動により、大東流柔術自体と惣角が研究されるようになった。

さらに、このような動きをきっかけにして古武道にも関心が持たれるようになり、徐々に大東流柔術に重点が置かれた情報発信が始まる。

昭和56年(1981年)の武田時宗宗家による演武 - 大東流九人捕秘法 - が全国放送され話題となり、『合気ニュース』によるインタビューに応じる等、大東流柔術について自ら語る機会が増えてくる。

昭和60-61(1985-1986)年にプラニンによって行われた武田前宗家へのインタビューでは、合気道側から発信されていた情報の訂正が以下のように行われている。

- ・植芝が惣角の教えを受けていた時期は短期間ではなかったこと。
- ・惣角の教授料はそれほど法外なものではなかったこと。
- ・北海道で新築の家を譲りうけてはいないこと。

これらは『英名録』に記された記録とともに写真付きで述べられている。また、これまでとは反対に惣角側から植芝について以下のような発信している。

- ・植芝が海軍関係を教授の際、合気ばかりでは難しく大変なので惣角が助けとして呼ばれたこと。
- ・植芝の後援者として知られる竹下勇海軍大将（1869 - 1949）は、惣角の弟子であったこと。
- ・惣角は大本教が好きではなかったこと。

さらに、惣角には不思議な神通力があり、声を聞いただけでその人物の過去・現在・未来まで見通すことができた、というエピソードも語られている⁷⁰⁾。

このように合気道側から発せられ通説となっていたことに反論し、これまでの惣角と大東流柔術のイメージを払拭し新しいイメージを再構築しようとしているのが理解できよう。

3. 植芝が大東流柔術から排除したもの

合気道と大東流柔術の技法を比較すると（別表：『合気道技法（複製版）』、『日本武道全集第五巻』参照。下線の技法が双方に共通しないもの）その大きな違いは、まず大東流柔術において、「合気」の技法は応用を学ぶ段階まで至らないと学べないということである。つまり、初級者には「合気」という技法は教えられないということになる。

『秘伝日本柔術』には「初めて惣角に教えを乞うた時、惣角先生から『合気は教えないが、柔術は教えてやる。』と言われた。」⁷¹⁾という弟子の逸話が述べられている。つまり、惣角は柔術と「合気」とを分けて扱っている。それゆえに大東流柔術と大東流合気柔術という二つの名称があるとされており、「合気」ということばと技法は初めから大東流柔術の中にあつた、というのが大東流柔術側の主張していることである。

一方、合気道側では、前述したように植芝が惣角より受けた允可に使われている名称が、大正5（1916）年に北海道で受けたものでは「大東流柔術」、大正11（1922）年に綾部で受けたものでは「大東流合気柔術」と変化し、これ以降惣角が「大東流合気柔術」の名称を使用していることから、この時期に綾部に身を寄せていた惣角が出口王仁三郎の勧めを受け入れて大東流に「合気」ということばを付け加え使用するようになった、としている。植芝は大本の機関誌『真如の光』でも「合気柔術はかつて聖師様が御命名なされた名であつて」⁷²⁾と述べており、「合気」ということばに関して両者の主張は対立している。

合気道側の主張について竹下勇海軍大将の日記を分析した志々田文明⁷³⁾は「惣角が植芝に与えた目録の存在をもって、植芝がその言葉を意味まで変えて、師である惣角に使用させ、流名を変更させた理由とする解釈には無理がある」⁷⁴⁾としている。

植芝が惣角に対し常に尊敬の念を持って接していたということは合気道側と大東流柔術側の見解が一致している点であり、また、植芝の「惣角に対する対応は尋常なものではなかった。(中略)ハッ、ハッと行って、畏まり、はらはらして仕えていた」⁷⁵⁾という大本教の三代教主出口直日の証言からも察せられるように、弟子の立場であった植芝が惣角に流派の名称の変更を提案したとは考えにくい。しかし、もしそれが出口王仁三郎からの直接の提案であったならば、当時半年近く綾部に滞在していた惣角も受け入れざるを得なかったとも考えられる。

「合気」ということばは既に明治期の武芸書『武道秘訣合気之術』において「玄妙不可思議ナルモノナリ」⁷⁶⁾と述べられており、主に相手の心の動きや攻撃の気を察する等の意味で使われている。大東流前宗家の語る「合気」とは先の先ではなく、後の先である、(相手が攻撃してくるのを外して打つという意味。)⁷⁷⁾ということもこの武芸書には示されており、前宗家はこの武芸書の内容を惣角から伝えられたと考えられないこともない。

大東流柔術では、「合気」はあくまで相手を攻撃するための技法であり、「合気をかける」という表現が多く使われている。「合気」は「敵につかまれる、押される、引かれる、組み付かれるなどの、いかなる攻撃を仕掛けられても、即座に敵の力を無にしてしまい、同時に敵の体勢を抵抗不能の状態にしてしまう技術」⁷⁸⁾であると説明されている。攻撃してきた相手の力を「合気」をかけて外し、無力化するのが「合気」であるという訳である。

これに対し合気道は、言うまでもなく「合気」なしには存在せず、「合気」が敵を倒すための技法の一部であるという捉え方をしていない。この差は「合気」に対する両者の根本的な考え方の相違から来るものであると考えられる。

植芝は『合気神髄』⁷⁹⁾で次のように述べている。

合気は真実そのものの現れであって、愛で世の中を吸収、和合させ、いかなるものができて、これを和合してゆくのである。(中略)人を殺すなかが合気であり、「合」は「愛」に通じるので、私は、私の会得した独自の道を「合気道」と呼ぶことにしたのである。従って、従来の武芸の人々が口にする「合気」と私のいう「合気」とは、その内容、本質が根本的に異なる⁸⁰⁾。

合気道では、「合気」とは敵を受け入れるために用い、相手と「合う＝結ぶ」ための道であり、人と人、さらには人と大宇宙を結ぶものである。植芝は「戦わずして勝つ」という平和の武道として合気道を創設したのであるから、従来の「合気」の定義とは根本的に異なっている。

技法の点から見れば合気道には逆手の技法がないこと、腹、足を使わないこと、担ぎ技がないことが目につく。これらの技法を省くことにより、合気道の技法も丸みを帯びたスムーズな動きとなっている。

また相手と「呼吸」を合わせること、つまり気を合わせるものが「合気」につながる、という考え方も見られる。技法の中に、合気道にはあるが、大東流柔術にはないというものが、それは、「呼吸法」という名称の技法である。「呼吸」という概念は合気道にとって非常に大切なものである。植芝は『武産合気』⁸¹⁾で「息と息が組み合わせざって言葉が出る。天と地の気が組み合わせられて万物が生まれる。(中略)人の息と天地の息は同一である。つまり、天の呼吸、地の呼吸を受け止めたのが人なのです。」⁸²⁾と述べており、何事をなすにもこの呼吸が重要であるとしている。

植芝は大東流柔術の技法から、実践的で戦闘的な技法——非常に苦痛を感じる逆手技法や危険な担ぎ技等——を取り除いた。やはり「世界を和合に導く」目的で創始された合気道には、これらの一つ間違えば容易に人を傷つけてしまう技法はふさわしくないと判断したと考えられる。

・惣角は稀に見る才能を持った天才武道家であったことは疑う余地もないことである。人生のほとんどを武者修行に費やし、自らの命がけの体験と研究・工夫により技法を研ぎ澄まし、または新たに考案し、大東流柔術を完全なものにするべく努力を重ねた。ちょうどこのような生き方は、最古の柔術流派と言われる竹内流の竹内久勝や久吉の生き方を彷彿とさせる。これらの竹内流の創始者たちは各地を遍歴し、真剣勝負を行い、その経験を型として次々と流儀に組み込んでいった⁸³⁾。

おそらく惣角も戦った経験を基に多くの大東流柔術の技法を改良、または考案していったと考えられる。このような惣角を出王三郎は「血の匂いがする」と言って好まなかったのであろう。

ゆえに、植芝はまったく根本的に考え方の違う惣角と大東流柔術の影響を受けたという点を可能な限り最小にしたかったと考えられる。確かに技法の名称や型は似通っているものが多く、合気道の技法は大東流柔術が基であることは明らかである。しかし、両者は武道に対する捉え方や目的が全く異なるため、植芝は平和な世界にふさわしい新しい武道のあり方を望んだのであろう。

おわりに

本稿では現代武道として目覚ましく発展した合気道の源流として注目されることとなった大東流柔術の歴史がどのように語られ、流派とその「中興の祖」とされる武田惣角のイメージがいかにして確立したかを検討した。

さらに、その確立してしまった本意でないイメージを再構築するために大東流柔術宗家はどのような流派史を創出したか、また、なぜそのような権威づけが必要であったのかを考察した。

最後に、植芝が大東流柔術のどのような部分を排除し、合気道を創始したかを検証し、合気道と大東流柔術との根本的な違いを明らかにした。

植芝は従来の「合気」の定義と使い方を根本的に変え、戦うための道具としての「合気」を他と和するためのものとしての「合気」にし、それを技法に表していったと考えられる。他と和する武道であるから、他を痛めることを主眼とした技法を排除したことは当然と考えられる。

一方、大東流柔術では「合気」は他の技法と区別され、基本技法で習得するものとされておらず、相手の力を無力化する技法として上級者向けに伝授されている。また、現在の合気道においては排除された多様な細かい技法を古武道として伝承している。

古武道に対する「前時代の遺物」であるかのような世間的イメージが、大東流柔術の出現によって変化したことは事実であり、これに対するこの流派の功績は大きいと言える。

宗家は古武道としての道を選択し、古武道界における大東流柔術の立場を確実にするためにこれまでのイメージを変化させようとした。しかし、もともとこの流派の人気が高まった理由は、武道関連雑誌等で取り上げられた大東流柔術としての個性——ミステリアス・謎の来歴、格闘技としての荒々しさと有効性、そして武田惣角の武道家としての特異性——によってであると考えられる。ゆえに、宗家とその西郷頼母からの系統や殿中護身武芸という説を強調するたび、また、惣角と植芝との逸話の訂正を語るたびにその荒々しい個性と古武道らしさというものは失われていくのではなからうか。

大東流柔術は古武道界に地位を確立し、新たな権威づけは成功したと言える。しかし、その反面ユニークさは消えていくと考えられる。

本稿において合気道の技法の源流とされている大東流柔術の伝承と会津藩御留め技、殿中護身用武芸との関係、さらに、植芝が大東流柔術のどのような部分を切り捨てたかを考察したことは、合気道技法の特異性を考察する際重要なポイントとなり、今後植芝盛平の研究を続けていく上で意味があったと言える。

合気道		大東流柔術
<ul style="list-style-type: none"> ・ 投げ技：四方投げ、入身投げ、回転投げ、小手返し <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・ 固め技：腕抑え（第一教）、 小手廻し（第二教）、 小手ひねり（第三教）、 手首抑え（第四教） 	基本技法	<ul style="list-style-type: none"> — 百十八か条裏表（大東流柔術秘伝目録） 一ヶ条、二ヶ条、三ヶ条、四ヶ条、五ヶ条（一部分）の五段階に分けられる。各ヶ条に：当て身、逆手、逆手投げ、入身投げ、入身転換投げ、合気投げ、担ぎ技、極め技、締め技、固め技がある。 * この段階ではまだ「合気」という語彙は使われていない。 (例外；合気投げ)
<ul style="list-style-type: none"> — 投げ技応用： ・ 四方投げ応用（横面打ち、肩取り、胸取り、後ろ両手取り四方投げの四態） ・ 入身投げ応用 六態 ・ 小手返し応用 六態 ・ 腰投げ応用 四態 ・ 天地投げ ・ 十字がらみ応用 二態 ・ 合気落とし応用 二態 ・ 角落とし応用 二態 ・ 呼吸投げ応用 三態 ・ 合気投げ 	応用技法	<ul style="list-style-type: none"> — 合気之術（大東流合気柔術秘伝） 一般用は三十ヶ条、さらに進む者には五十三ヶ条が与えられる。 * この段階で初めて「大東流合気柔術」という名称が使われ、ここに至って合気柔術が本格的に伝えられる。 — 秘伝奥義（大東流合気柔術秘伝奥義） 三十カ条、あるいは三十六ヶ条。この段階においては、これまでと異なる巧妙な逆手投げ、逆手極め技などを学ぶ。 これまでのただ手を用いるだけでなく、全身の肘、肩、胸、腹、腰、足を利用し、極める技法。

<p>— 固め技応用：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・腕抑え（第一教）：片手取り、両手取り、肩取り、腕取り、横面打ち、正面突き、後襟取り、後首締め腕抑え） ・小手廻し（第二教）：腕抑え応用と同様であるが、正面突きと後首締めがない。 ・小手ひねり（第三教）：腕抑え応用と同様であるが、後首締めの代わりに後片手取り首締め小手ひねりがある。 ・手首抑え（第四教）：後両肩取り手首抑え、正面突き手首抑え 	<p>応用技法</p>	<p>— 御信用之手（大東流合気柔術極秘八十四ヶ条） 相手の背後に入り込んで極める技法が多い。 ここに至ったものには「教授代理」の資格が与えられる。*植芝にはこの段階までの巻物が授けられている。</p> <p>— 皆伝八十八ヶ条（大東流合気柔術皆伝） 大東流合気柔術における最高極意。惣角よりこれを授けられたのは、佐川幸義宗範と久琢磨師範の二人のみ。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・短刀取り ・杖取り（槍術の捌きから発している） ・刀剣取り 	<p>武器術</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・合気棒術 ・合気太刀術 ・合気二刀術 ・合気槍術

注

- 1) 古武道の定義は、『日本古武道総覧』（鳥津書房、1989年）によると、室町時代に勃興し、体系化、理論化が進み体裁が整えられ、流派が芽生え、各流租によりそれらの術技が総合武術として確立する。そしてそれらが江戸期に入って剣術のみ、柔術のみというように分割され伝承されてきたものであると述べられている。つまり明治期以前に体系化されていたものは古武道、それ以降のものは現代武道と言えるであろう。
- 2) 綿谷雪、山田忠史編『武芸流派大辞典』東京コピイ出版部、1978年、519頁。大東流伝書には武田国継の名が見られ、惣角は国継の末孫とされている。
- 3) 松田隆智『秘伝日本柔術（復刻版）』壮神社、2000年、初版1978年。
- 4) 同書、181頁。
- 5) 平上信行『秘伝古流柔術技法』愛隆堂、1992年。
- 6) 同書、189頁。
- 7) スタンレー・プラニン『武田惣角と大東流合気柔術』（合気ニュース編、1992年）によると、『英名録』とは1898年からの惣角の活動と足跡を記録したもの。『英名録』と『謝礼録』があり、二千頁以上に及び、何千人にもものぼる弟子たちの名前、住所、稽古日、謝礼額、その他のことが記されている。
- 8) 平上前掲書、350頁。
- 9) 1974年創刊の合気道専門の季刊誌。
- 10) 『合気ニュース』の創始者、初代編集長。合気道研究者。
- 11) スタンレー・プラニン『武田惣角と大東流合気柔術』合気ニュース編、1992年。
- 12) 松田、前掲書、177-249頁。
- 13) 津本陽『鬼の冠』実業之日本社、1987年。
- 14) プラニン前掲書、14-47頁。
- 15) 松田前掲書、181-183頁。
- 16) 『秘伝 特別編 大東流合気柔術総覧』BAB ジャパン、1996年、17頁。
- 17) 松田前掲書、187頁。
- 18) プラニン前掲書、20頁。
- 19) 同書、22頁。
- 20) 植芝吉祥丸『合気道開祖植芝盛平伝』講談社、1978年、砂泊兼基『武の真人』たま出版、1981年。
- 21) 植芝吉祥丸『合気道開祖植芝盛平伝』改訂版、出版芸術社、1999年。
- 22) 同書、97頁。

- 23) 植芝吉祥丸『合気道（復刻版）』出版芸術社、1996年、初版1957年。
- 24) 同書、27頁。
- 25) 植芝吉祥丸『合気道技法（復刻版）』出版芸術社、2007年、初版1962年。
- 26) 同書、18頁。
- 27) 砂泊兼基『武の真人』たま出版、1981年。
- 28) 同書、34頁。
- 29) 井上強一『合気道基本技術教本』合気ニュース、1999年、8頁。
- 30) 立山一朗『合気之術』真実社、1956年、5-6頁。
- 31) 同書、110頁。
- 32) 綿谷雪、山田忠史『武芸流派大事典』東京コピイ社、1978年。
- 33) 同書、519頁。
- 34) しかし、小川涉『会津藩教育考』（1941年、井田書店）によると日新館教授科目の柔術並びに居合術の中に大東流の名称を確認することはできない。
- 35) 松田前掲書、181-182頁。
- 36) 日本古武道協会編『日本古武道総覧』島津書房、1989年。
- 37) 同書、23頁。
- 38) プラニン前掲書、272頁。
- 39) 同書、273頁。
- 40) 堀田節夫『最後の会津藩家老西郷頼母』歴史春秋出版、1993年、25頁。
- 41) 牧野登『史伝西郷四郎』島津書房、1983年、81頁。
- 42) 松田前掲書、183頁。
- 43) 西郷頼母研究会『西郷頼母近恵の生涯』牧野出版、1977年。
- 44) 同書、137-138頁。
- 45) 同書、138頁。
- 46) 日本古武道協会編『日本古武道総覧』島津書房、1989年、3頁。
- 47) 1989年、『日本古武道総覧』、『古流柔術』、1990年『月刊秘伝』、1992年『秘伝古流柔術』、1999年『大東流合気柔術』。
- 48) 「昨年、武道が大変なブームとなっている」と1989年に出版された『日本古武道総覧』では述べられている。
- 49) 松田前掲書、21頁。
- 50) 平上前掲書、332頁。
- 51) プラニン編前掲書、270頁。
- 52) 井上俊『武道の誕生』吉川広文館、2004年、46頁。

- 53) 井上強一前掲書、47頁。
- 54) 植芝監修、植芝吉祥丸『合気道』光和堂、1957年。
- 55) 財団法人合気会機関紙。
- 56) 山田克郎『王者の庭植芝盛平伝』浪速書房、1958年。
- 57) 植芝監修、植芝吉祥丸『合気道技法』光和堂、初版1962年。
- 58) 砂泊兼基『合気道開祖植芝盛平』講談社、1969年。
- 59) 植芝吉祥丸『合気道教範』東京書店、1970年。
- 60) 植芝吉祥丸『絵説合気道独習教本』、東京書店、1973年。
- 61) スタンレー・プラニンにより季刊。現在はどう出版と名称変更。
- 62) 植芝吉祥丸『合気道開祖植芝盛平伝』、出版芸術社、1978年。
- 63) 植芝吉祥丸『合気道のこころ』光和堂、初版1981年。
- 64) 植芝監修、植芝吉祥丸前掲書、1957年、36 - 37頁。
- 65) 同書、202-203頁。巻末に「道主を中心とした或る座談会」と題する、10日間に渡つてある新聞に掲載された記事の抜粋が載せられている。
- 66) 同書、36-37頁。
- 67) 同書、19-20頁。
- 68) 植芝監修、植芝吉祥丸、前掲書、1962年、22-23頁。
- 69) 植芝吉祥丸、前掲書、1981年、19-20頁。
- 70) プラニン前掲書、246 - 270頁。
- 71) 松田前傾書、228頁。
- 72) 大本教団『真如の光』1932年、7月5日号。
- 73) 早稲田大学教授、合気道研究者。
- 74) 志々田文明「海軍大将竹下勇・武術日記と大正15年前後の植芝盛平」『武道学研究』25巻2号、1992年。
- 75) 同論考、11頁。
- 76) 無名子、『武道秘訣合氣之術』藍外堂、1900年、国立国会図書館デジタル化資料。
- 77) プラニン前傾書、274頁。
- 78) 松田前傾書、178頁。
- 79) 植芝吉祥丸監修『合気神髄』、八幡出版、2002年。
- 80) 同書、41頁。
- 81) 高橋英雄、『武産合気』白光出版、1986年。
- 82) 同書、133頁。
- 83) 松田前掲書、21-37頁。